

野郎評判記『姿記評林』における音象徴語の漢字表記

——漢字の用法の多様化——

藤 井 涼 子

はじめに

1 調査の目的

漢字、漢語が現代日本語の語彙の形成にどのように関わってきたのか、この点を国語史のなかで考える時に、近世においては、「漢語の通俗化」と同時に、表記する漢字も又、従来にない自由奔放さで用いられる傾向が指摘される。^①

本稿では、こうした漢字の用法の多様化の実態とそれが以後の表記、語彙に与える影響を明らかにする目的で、和語の音象徴語の漢字表記をとりあげる。和語音象徴語の場合、それを漢字表記する習慣がないために、既存の漢字、漢語を表記に利用するにしても、独自の工夫が必要であり、漢字使用の多彩な面が見られると予想するためである。

2 資料

資料として、元禄十三（1700）年刊行、野郎評判記『姿記評林』をとりあげる。野郎歌舞伎の役者、各人についての評判を漢字仮名まじりで記し、さらに、役者名を詠みこんだ狂詩を姿絵に添えたもので、野郎評判記のなかでは、末期のものである。

この種の評判記、狂詩に俗語の漢字表記が多くあることは、すでに指摘される。^② 内容自体が娯楽的なものであると同時に、表現に関しても役者名を詠み込む等、言語遊戯的な性格が強いものである。

資料の構成は、漢文序、和文序（漢字仮名混じり）、漢和聯句、本文（漢字仮名混じりの評判、狂詩）、賦、詩、跋文から成る。今回は本文と末尾の漢詩二首を調査の対象とした。

一 音象徴語の型の分布

和文序、評判に用いられる和語音象徴語のうち、漢字表記されるものは延べ四語、狂詩の部分に用いられる音象徴語は延べ四六語である。いずれも名詞、副詞として用いられるものを対象とした。

これらの音象徴語には次のような型がある。使用度数二以上のものは()内に示す。

一拍	A	ち(3)	ちよ
	A A	かか	
	A B	がは	ちら むず
	A っ	くわっ	そっ(2) どっ ちよっ はっ
		ひよっ	
	A ん	しゃん	
三拍	A B り	ころり(5)	ほろり
	A っ B	にっこ	
	A ん B	どんぶ	
四拍	A B A B	うかうか(4)	ぐるぐる(2) ざはざは ぞくぞく
		ちらちら	ていてい にこにこ びくびく きよ
		ろきよろ	ぐはらぐはら ちよいちよい
	A っ B り	うっかり(3)	さっはり どっかり ひよっこり

野郎評判記「姿記評林」における音象徴語の漢字表記

びっくり ぼつとり

A ん A ん かんかん

A っ A っ ひよっひよっ

A A ん A ざざんざ

一拍のA っ型、四拍のA B A B型、A っB り型が比較的多い。A B A B型、A っB り型は近世に入ってその増加が著しく、特にA っB り型は「当代的な擬声語副詞」といわれる^③。資料の性格から考えて、音象徴語のなかでも、こういった新しい語が用いられるのは当然であろう。

二 漢字用法別にみた音象徴語

これらの和語音象徴語の漢字の字数別、用法別に示したものが表1である。

表1 「姿記評林」の音象徴語 用法、字数別漢字表記

借音	四字	三字	二字	一字
		孤露離 <small>ころうり</small> 發露離 <small>はろうり</small> 颯破離 <small>さつぱり</small>	丁丁 <small>ていてい</small> 綴綴 <small>ぞくぞく</small> ノノ <small>ひよっひよ</small>	潤 <small>うる</small> 潑 <small>は</small> 卒 <small>そ</small> 標 <small>ひょう</small> 颯 <small>さつ</small>
			加加 <small>かか</small> 無下 <small>むげ</small> 勃然 <small>はつぜん</small> 岸波 <small>かみなみ</small> 嘩許 <small>かみかき</small> 偏起 <small>へんき</small>	

国字	借義	借音義	借訓
	(注2) 萬輪萬輪(2) 猿呂猿呂	瓦落瓦落	(注1) 浮石浮石 一能一能
	颯颯		散散 浮浮(3)
	一寸 恂恂 颯颯		散
井 <small>いどよ</small>	空 <small>くう</small> (2) 少 <small>せう</small> (2) 磊 <small>らい</small> (3) 些 <small>せ</small> 控 <small>くわう</small>	恂 <small>じゆん</small> 自 <small>じ</small> 颯 <small>さつ</small> 颯 <small>さつ</small>	清 <small>せい</small> 咄 <small>とつ</small> 散 <small>さん</small>

注1 一能一能(ちよいちよいの「一」は借義用法)

注2 猿呂猿呂(きよろきよろ)の「呂」は借音用法

表記に用いる漢字の字数は、一、二字のものが多く、四字のものは字数制限のゆるやかな箇所、序文などで用いられる傾向がある。

個々の表記の事情は様々であるが、全体を概観して、音象徴語の漢字表記には「漢字の字音による直接的表記が最も簡便である」と言われるが、「颯破理(さつぱり)」のようなその典型例は意外に少なく、むしろ、「一能一能(ちよいちよい)」「勃然(ぼつとり)」など、複数の用法を組み合わせた表記が目につく。以下、各用法別に

その特徴を考えてみたい。

三 借義用法の特徴

借義用法においては、漢字、漢字連続と、それによって表記される音象徴語は、意義の点で何らかのつながりをもつ。この意義の有契性という点から(1) 訳語型、(2) 連想型、二つの型に分けて考察する。

三・1 借義用法 訳語型

—— 颯然(にこにこ)、恂恂(びくびく)、颯颯(ざざんざ) ——
訳語型とは、その漢字連続が漢語としての典拠をもち、そうした本来の意味用法にはば一致する和語を表記するものをいう。例1「颯然(にこにこ)はその典型的な例である。

例1 野夫披颯然若章(やははひろげてにこにこきみのたまづさ)「颯」は「集韻」に「颯、笑兒」とあり、「颯然」は「莊子・達生」に「齊桓公颯然而笑」とあり、大笑いの様を表す語である。

漢語本来の用法と「にこにこ」では、やや意味が異なる面もあるが、例2、3のように既に中古末の辞書に見られ、こうした伝統的な理解に基づいた表記である。

例2 颯然 ニココ笑詞也ニココンズ 完爾 同(色葉字類抄 前田本 疊字門)

例3 飄然 ニココニ(類聚名義抄 観智院本 僧下 九二)

この他に「恂恂(びくびく)」「颯颯(ざざは)」等も訳語型の表記である。

しかし、中には訳語型の表記を利用しながらも音象徴語の側の意味が変化したため、両者のつながりが分かりにくくなるものがある。その例として「颯颯(ざざんざざ)」をとりあげる。漢字音「サツ」を利用したとも考えられ、その場合は借音義表記となるが、ここでは、意味のつながりについてのみ考察する。

例5 嶋原がよひの家質を流し道頓掘ぐるひして御城米かりて切近くくらの大尽の御名は一桎切の念仏大尽あるひはお江戸ならば本郷の風大尽あるひは神田鍋町の丸太大尽といふならんか、されば大和川の大尽衆の御名は川村殿とおぼしめせ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓

ひいきとする大尺衆の遊樂の様を表すとも言える。漢語本来の意義に基づいて、和語音象徴語独自の意義をも表す表記で、訳語型を利用したものである。

三・2 借義用法 連想型

―自(ころり)、猿呂猿呂(きよろきよろ)、磊(ころり)―

音象徴語と、それを表記する漢字、漢字連続のあいだに、連想がはたらくものをここでとりあげる。連想の形式には、大きく分けて類似性によるものと近接性によるものがあり、それぞれについて考えてみたい。

意義の類似性による連想とは、二語が互いに類似した意味特徴を持つ場合に生じる連想で、「一寸(ちよっと)」「空(うっかり)」「自(ころり)」などがそうした連想による表記の例である。

「ちよっと」の意味用法は多岐にわたるが、時間、数量、程度などの少ない状態を表すことが、その語義の中心である。一方、「一寸」は長さの単位であり、一尺の十分の一という短い長さを表す。つまり、両者は具象と抽象という関係にあるが、対象とする数量、程度の少なさという点では類似した意味特徴をもち、それによって連想が生じ、表記が成立する。

「うっかり」は、茫然自失の様、不注意な様など、何らかの理由で正気や注意が失われた精神状態を表す。「空」は「説文」に「空、

竅也、从穴工聲」、「集韻」に「虚也」とあり、中身がない状態を表す。両者は何かが無い状態を表すという点で類似した意味特徴をもち、それによって連想が生じ、表記が成立する。

こうした中に、両者の意義は確かに共通するが、使われる文体や場面の相違がかなり大きいものがある。次にその例を示す。

例8 鐵甲還薄藝還厚(テツカウハカヘツテウスケイハカヘツ

テアツシ)

七變七頒左不究(ナナタビヘンジ ワカレテドモキハマラ

ズ)

今日此君舞亂時(コンニチコノキミミダレラマフトキ)

猩猩自得離禽獸(セウドクモコロリ キンジウラハナルルコト

ラエタリ)

元禄十年、水木辰之助が演じた「七化狂詩」のうち、猩猩への早変わりをほめたものである。第四句の「自」について考えてみたい。この句は「礼記・曲礼」の「鸚鵡能言 不離飛鳥 猩猩能言 不離禽獸」をもじったものと思われる。

「自」の本来の字義は自分をさすものであるが、その用法は多岐にわたり、中に副詞として使われ「おのづから」と訓読されるものがある。

例9 以此任天下若徒 謂不勝而自勝 不任而自任也

(列子 黄帝二)

例9がその例で「勝とうなどとは思わないで、自然に勝つてしまひ、よくしようなどとはおもわなひで自然にできてしまふ」という意味である。ここに「自」の字義として、「他からの力なしに、ひとり^⑦でにそうなる様」を認めることができる。

次の例は近世の人々が漢文を学ぶ際に、やはりこのように「自」を理解していたことを示すものである。

例10 自 ミツカラ、ヲノツカラ両意ナリ。畢竟ハ両義トモニ一義ナリ。ワキカラハカマハス其物ナリニト云ユヘニ、ヲノツカラ

モ元来ミツカラヨリ出ナリ(訓譯字彙 五)

そして、例8「猩猩自_レ得_レ離禽獸」の「自」も、舞があまりにもすばらしいため、自然に、猩猩も禽獸の域をこえたものに感じられるという意味で、例9・10と同様の字義から理解される。

一方、音象徴語「ころり」は、(一)玉状、円筒状のものが転がったり、倒れたりする様子 (二)突然に、またたやすくその状態になる様子 と現代語では説明されるが、近世の用例を見てもそれは変わらず、例9「猩猩もころり」は(二)の意義から理解できる。

「自」と「ころり」両語の意義を比較すると、「ある状態への変化が容易に起こる様子を表す」という点で共通する。類似性に基づく連想が両者をつなぐ表記である。

しかし、近世の「ころり」の用例を見ると、「ころりとしく」で急に人が死ぬ様を表すもの、「ころりとする」で、簡単に異性を好きになつてしまふさまをあらわすもの、こうした例が多い。他に、病名としての「ころり」、百文の金を表す符丁としての「ころり」もある。本来、音象徴語は俗的な語感をもつ語であるが、「ころり」の用例を見ると、さらにその傾向は強い。「自」と「ころり」、意義は類似しながらも、与える語感はかなり異なる。また、同語異表記「磊」「孤露離」と比べた時に、このような語感の相違が生み出す面白さは明らかである。

類似性による連想に基づく表記の場合は、以後の漢文漢籍をもじつた洒落本類も同様であるが、漢字、漢語のもつ堅い語感と和語の語感との落差が積極的に表記に生かされるという面があるようである。

意義の近接性による連想とは、全体と部分、対象とその属性というように、近接した意味特徴を両語がもつ場合に生じる連想である。ここでは「萬輪萬輪(ぐるぐる)」「猿呂猿呂(きよろきよろ)」「磊(ころり)」がそうであり、つぎのように使われる。

例11 一座仕成はなし御眈は猿呂猿呂(きよろきよろ)

例12 木野夫磊三指激(きやほもころりみつゆびをやはらぐ)

「萬輪萬輪」「猿呂猿呂」は四字漢語としての典拠が見いだされず、

音象徴語を表記するために作り出された漢字連続である可能性が強いが、輪がぐるぐる回る、猿がきよろきよろ見るといのように、「輪」「猿」の属性として連想される状態が「ぐるぐる」「きよろきよろ」であり、漢字連続の表す事物とその属性という関係がここに認められる。

「磊」は『説文』に「衆石兒、从三石」とあり、多くの石が重なった状態、あるいは「多くの石」そのものを表す。そして、「ころり」はさきふれたように、球形、円筒状の物がころがる様子を表す点を（一）義にもつ。これもまた近接性に基づいた連想によって、表記が成立し、更に「ころり」の（二）義で用いる例である。

近接性による連想に基づいた表記の場合、その連想の必然性は個々の語によって異なる。しかし、逆に、必然性の低いものには、意表をついたおもしろさがあり、それが書き手の意図したところではなかったかと考える。その結果生じる表記の不安定性は、「猿呂猿呂」のように部分的に語形を示す工夫で補ったのであろう。

音象徴語の漢字表記、借義用法における二つの型、訳語型、連想型を見てきた。

訳語型も又類似性の高い連想型の表記と言えるが、特に、本来の漢字漢語の意味用法を尊重する表記であり、伝統的な漢字の用法とすることができ。

連想型の場合、類似性に基づくものは、漢字、漢語と和語との相違を積極的に表記に生かし、その落差をおもしろがる傾向がある。又、近接性に基づくものは、漢字漢語の用法に関わらず全く自由奔放に漢字を用い、その奇抜さこそが表現の意図であつたように思う。借義用法における漢字、漢語の意義の生かし方に、このような三つの傾向があり、近世における漢字表記の一つの特徴と言えるのではないか、このように考えて、以下の考察をすすめる。

四 借音用法の特徴

借音用法のうち、漢字連続二字のものをとりあげる。この中には漢字連続全体が借音用法によるものと、そうでないものがある。最初に、漢字連続全体が借音用法によるものを見てみたい。

四・1 全体的な借音用法

一 丁丁（ていてい）、鏃鏃（ぞくぞく）、ノノ（ひよっひよっ）——「丁丁」、「鏃鏃」は共に漢語としての典故をもつが、そうした意味用法とは全く別であり、漢字の音形態のみを利用した表記である。「丁丁」は『詩経 小雅』に「伐木丁丁鳥鳴嚶嚶」とあり、木を切る音をあらわす漢語象声詞である。この他に、杭をうつ音、碁をうつ音、馬の轡の音なども表す。

日本では、おそらく『詩経』の学習をとおして、その意味用法に

ついてはよく知られていたように思う。^{〔ト〕} 伐木―詩經（合類節用集卷八下）とあり、また「^{〔ト〕}丁丁 八チハチ困碁之色」（書言字考節用集卷八）のように借義用法をのせる辞書もある。

しかし、この資料では次の例13のように、子供に対して、自分の頭を打つてみせるときの言葉として用いられている。漢字、漢語の意味とは全く別の用法である。

例13 「^{〔ト〕}三口禿丁」（カンカンミツクチツブリテイ）

もう一例の「^{〔ト〕}鏃鏃」は、漢語としては、目立つ様、抜きんでた様を表すのであるが、ここでは、次のように、嬉しさのあまりに落ちて着きを失う様子を「ぞくぞく」と言い、その表記に利用される。

例14 忝御一言心鏃鏃（かたじけなきこいちごんにこころぞく）

又、この語は、今回は調査の対象としなかった末尾の「遊宮川賦」にも次のように用いられる。

例15 未^{イマ}レ息^{マコ}心^コ悽^ク愴^ク以^テ感^ズ發^ス 意^コ鏃^ク鏃^ク而不^レ往^ク階^カ除^カ而下^ラ降^ル

その意味は例14と同様であるが、「^{〔ト〕}情^シ緩^ク緩^ク而^シ」^{〔ト〕}「^{〔ト〕}路^ミ透^ク透^ク進^ム進^ム修^ム迴^ル」^{〔ト〕}「^{〔ト〕}風^カ蕭^ソ瑟^ト」等の漢語と共に用いられ、一見したところ、和語の音象徴語の表記とは気付きにくい。

借音用法の中でも、表記すべき音象徴語がA B A B型という語基反復式の場合は、外見的には漢語と共通した語構成をもつことにな

り、既存の漢語を利用することは容易である。又、それと同時に漢文の色彩の強い文章に、こうした和語の漢字表記を盛り込む面白さも表現可能なのである。

また「ノ」（ひよつひよつ）は使用される場面という点で特徴的である。漢語としての用例はまだ見出し得ていないが「ノ」は字音「ヘツ」右から左に曲がる意を表し、「ノ」は字音「フツ」、左から右に曲がる意を表す。

日本においては近世初の笑話集「醒睡笑」卷之三、十一に「師匠が返答に「ノ」夕夕、人が多いに無用、」といふ」と、「人」という字を分解して「ノ」示した話が収められている。この語がこうした話に登場することは、この字形に多少とも関心がもたれていたこと、両字の字音はよく知られていたことを示すのではないか。いくつかの同時期の節用集にも収録される。

この資料では、次のように用いられる。

例16 彼竹林師ノノ（かのちくりんのすいもひよつくとびでて）

音象徴語「ひよつひよつ」は「詞をひよつひよつと云はいでよいぞ」（周易抄）という例がある。その意味用法は「ひよつと」「ひよつこり」などと共通するが、物や人が不意に、思いがけず、次々に現れる様子を表す。例16の「竹林師」は竹林七賢をさし、「ひよつ

ひよつ」は、それが不意に、身軽に、次々に現れることになる。

漢字連続「ノノ」は、この二例ともかなり滑稽な場面で用いられている。漢語としての典故を求め、比較する必要があるが、あるいは、これも非常に日本的な使い方かと考える。

この他の同字反復の表記例には「カカ」（かんかん）、「加加（かか）」があり、一種のはやしことばのようなものと考えるが、その意味は不明であり、今後の課題としたい。

四・2 部分的な借音用法

― 勃然（ぼつとり）、偏起（ひよつこり）、無下（むず） ―

部分的な借音用法の例として「勃然（ぼつとり）」「偏起（ひよつこり）」「噀許（どつかり）」をとりあげる。これらはいずれも借音用法と他用法をくみあわせたものである。

「勃」は「説文」に「勃排也 从力字聲」とあり、何かをおしつけて現れる義、そこから、急に事が生じる様を表す。「勃然」も又「有聖人勃然而起乃討強暴平亂世」（淮南子 兵略訓）のように同様である。

例17 現にも舞臺の面影、神ぞ牡丹をあざむく勃然（ぼつとり）とし
たしなし

例17がここでの用例であるが、「ぼつとり」はふくよかな容姿の愛らしさを表し、その表記のしくみは「勃」の字音「ボツ」を借り、

「然」はこの漢字連続が状態を表す語であることを示す。つまり、借音用法「勃」と借義（ただし、文法的な意味を借りる）用法「然」をくみあわせたものと言える。

例18 山散散偏起戀山（やまからちらくひよつこりこひのやま）

例19 辰巳噀許乾颯颯（たつみにどつかりいぬいにざはざは）

例18は久しぶりに目にした役者に対する詩であり、音象徴語「ひよつこり」は「不意に出合う、現れる様」を表すと考えてよいだろう。表記にあてられる「偏起」は漢語としての用法は見つからず、「偏」の字義とも無関係な使われ方である。その字音「ヒツ・ヒョク」を借り、「起」の意義「おきる、おこる、それまでなかったものが生じる」を借りたもの、借音用法と借義用法をくみあわせた表記である。又、例19はその文脈が理解しにくいが、表記のしくみは「噀」の字音「ドウ」を借り、「かり」は、漢字「許」が「その人のもとに、ところに」という意味の接尾語、「がり」を表すことから、その音形態を借りて表記する。借音用法と一種の借訓用法と言うことができる。

この三語は、AつBり型の音象徴語を、借音用法に複数の用法を組み合わせて表記する点で共通する。本資料においては三例のみであるが、同種の表記が、同時期の野郎評判記、「漢詩文調の俳諧の流行によって編まれた世話字集」^⑨に多く見られる。そうした世話字

集の一つ、『反故集』におけるAつBり型の音象徴語の漢字表記を次に示す。傍線は『姿記評林』と共通する表記を示す。

⑦為發(ばつたり) 為突(どつたり) 為窟(くつしり) 為愚(ぐくしり) 為侵(ひつたり) 為密(びつたり) 囉許(どつかり) 吃許(きつかり) 銀許(ぎんがり) 透許(すつかり) 偏起(ひよつこり) ⑧屈通利(くつつり) 忽屈理(こつくり) 忽法理(こつぱり) 颯波理(さつぱり) 真味理(しんみり) 得理(どつくり) 熱存理(ねつそり) 發知(はつしり) 發屈理(ほつくり) 質曲輪(しつくり) 旦暮(たんまり) 波線部は借義用法

⑨埴破(はんなり) 婁約(にんまり) 懸(ほつてり) 發憤(むつかり) 蔓延(のつしり) 湛浮(たんぶり)

語群アは先の三例と同様に、借音用法と他用法を組み合わせた表記で、為(ゝたり、しり)型、一起(ゝこり)型、一許(ゝこり)型がある。語群イは一字一音式の借音用法、語群ウは借義用法である。多様な用法がとられるが、語群アが占める部分はかなり大きい。

AつBり型はどちらかと言えば新しい型の音象徴語と言われるが、その表記には「颯波離」のように、一字一音式の表記法が簡便であり多く用いられた。しかし、そうした表記がありふれたものになってきた時、「一然」「一許」「一型」の表記は造語が簡単であり、漢

語風の外見を持つ点で新鮮であり、一字一音式の表記に比べて、少ない字数ですみ有利なため、それに代わって用いられたのではない。又、こうした表記は同時期の節用集には見られないようで、本資料における特徴的な表記として、近世の表記全体の中で考える必要がある。

本資料には成立過程が不明な表記も多いが、その一例として「無下(むず)」をとりあげる。

例20 無下引組人目關(むずとひつくまんとすればひとめのせき)

音象徴語「むず」は「力をこめて何かを強くする様」を表し、動詞「組む」と共に用いられることが多く、例20もそうである。こうした表記が一般的なものでどうか、やや時代をさかのぼってみると、「先座主御前參御手無須摘」(平松家本平家物語卷二)、「無手十組擽・組」(運歩色葉集)、「高紐无乎搏」(温故知新集)のように、借音用法「無須」「無手」が見られるが、「十」「擽」のように表記のしくみが理解しにくいものもある。「無下」は、「統無名抄」世話字尽に「無下取(むげに)」と並んで「無下(むず)」が見られるが、一例のみであり、これとのつながりは不明である。

この表記について考えられることの一つに、漢語「無下」との関係がある。「無下」は「冷酷、無情に事を行う様」を表すが、例20もそうした意味で理解可能である。又、漢字「下」が役者名の一

字にあたることも関わったと思われる。漢語の意味を利用した臨時的な表記の可能性が高いが、更に調査し考えてみたい。

以上、借音用法の漢字表記をいくつかとりあげた。「丁（ていてい）」「鏃鏃（ぞくぞく）」のように、漢語としての典拠はあるものの、それを離れて全く自由に用いるもの、「ノ入（ひよっひよっ）」のようにながら滑らかな表現として用いるものが特徴的である。しかし、単に漢字、漢語の意味用法を離れた自由奔放な表記を作りだすのではなく、「勃然（ぼつとり）」「偃起（ひよっこり）」のように、漢語の語構成にならないその造語力、語感を利用するものも、この資料における表記の一特徴である。

五 他資料との比較

最後に、これまで見てきた「姿記評林」の漢字表記が近世の漢字表記の中でどのような位置を占めるのか、他資料と比較することで考えてみたい。

表2 「雨夜三杯機嫌」の音象徴語 用法、字数別漢字表記

音	四字	三字	二字	一字
如驚如驚 左来左来	飄乎飄乎 飄乎飄乎	孤露離 無屈離	為愚 為勃	濁
愚弱離 頭顛顛	飄屈理 颯破離	為突 為別	嘩	如

国字	借義	借音義	借訓	借
	閃電閃電	瓦落瓦落		
		瓦墮離		忽鼠粟 破落理 基亂離
井井	右行 如龜 亮爾	曲輪 墮落	透切	活々々
井と	閃疾 自寛	颯和	殺	卒激

傍線は「姿記評林」と共通する表記を示す。

狂詩を伴う役者評判記の最も初期のものである「野郎虫」（一六六〇?）「剝野老」（一六六二）には狂詩中に音象徴語がよみこまれることはないが、「姿記評林」に先立つ「雨夜三杯機嫌」（一六九二）「養張草」（一六九二）には同様の表記が多く見られる。表2は「雨夜三杯機嫌」の狂詩中の音象徴語の漢字表記を、字数、用法別にあげたものである。表1と比べて、一字一音式、「為」型の借音用法など、更に多様であるが、共通するものも多い。役者評判記

の前期と後期ではその狂詩の表現の性質が異なることは指摘されているが、^⑩こうした音象徴語の漢字表記は、役者評判記の中では、後期に特有のものと言える。

こうした表記が前代の表記とどのように関わるのか、室町期の節用集にしても音象徴語自体が収録されることが少なく、十分に比較することは困難であるが、借義用法、訳語型のように伝統的な表記も一部に認められる。

一方、同時期の表記とはどう関わるのか、近世前期の節用集である『節用集大全』（二六八〇）『合類節用集』（二六八〇）『書言字考節用集』（二七二七）、先にとりあげた世話字集『反故集』と比較したものが次の表3である。

表3 近世前期の節用集、世話字集に見られる音象徴語の漢字表記

反故	書言	大全	合類	
	發露啼泣 <small>ホロトナク</small>			孤露離・自・磊 <small>はろり</small>
			發露啼 <small>ホロトナク</small>	發露離 <small>はろり</small>
				颯破離 <small>さつぱり</small>
颯破離 <small>さつぱり</small>				丁て丁 <small>てて</small>
	(丁々) <small>チチ</small>		(丁々) <small>チチ</small>	
				鐵鐵 <small>てつてつ</small>

反故	書言	大全	合類	
ノ起 <small>ノヒキ</small>	ノ起 <small>ノヒキ</small>	ノ起 <small>ノヒキ</small>	ノ起 <small>ノヒキ</small>	ノ起 <small>ノヒキ</small>
				無下 <small>ムシヤ</small>
	擲抱 <small>ムネトケム</small>	無手 <small>ムシテ</small>	無手・擲組 <small>ムネトケム</small>	
閻敷 <small>カハバ</small>	岸破倒 <small>カハバクラ</small>	可波起 <small>カハバ</small>	岸波 <small>カハバ</small>	岸波 <small>カハバ</small>
				勃然 <small>ハツシ</small>
嚏許 <small>ドクツケ</small>				嚏許 <small>ドクツケ</small>

反故	書言	大全	合類	
偪起 <small>ヒツコリ</small>				偪起 <small>ヒツコリ</small>
			潤散 <small>クハシタル</small>	闊 <small>クハ</small>
	卒度 <small>ソツド</small>	卒度 <small>ソツド</small>	卒度 <small>ソツド</small>	卒・颯 <small>ソツ</small>
標 <small>ヒョウ</small>	剝 <small>ヒョウト</small>	標 <small>ヒョウ</small>	標 <small>ヒョウ</small>	標 <small>ヒョウ</small>
浮々 <small>ウカウカ</small>	虚々 <small>ウカウカ・ウツラウ</small>		浮々 <small>ウカウカ</small>	浮石浮石・浮浮 <small>ウカウカ</small>
			散々 <small>チロク・チラク</small>	散散 <small>チロク</small>
閃々 <small>チラウ</small>				

落々々 グハラグハラ 俗字」「虚勞々々 キョロキョロ 俚俗ノ常談」(書言字考節用集)のように、この資料に見られるいくつかの表記は俗的な表記としてとらえられていることに注意したい。又、四節で見た「勃然(ぼつとり)」「嘩訐(どつかり)」は収録されず、同種の表記も収録されないようである。更に調査が必要であるが、今後、こうした表記の性格を考察する一つの手がかりとなるかと考える。

おわりに

限られた部分ではあるが、音象徴語の漢字表記の実態を借義用法と借音用法に分けて見てきた。次の三点がその特徴としてとらえられる。

第一に、表語文字である漢字の特性を十分に生かし、複数の用法を組み合わせた表記がとられる。

第二に、借義用法においては、漢字、漢語本来の意味用法との関わりという点で、次のような傾向が見られる。

ア 忠実に漢字・漢語の意味用法を生かす。「訳語型」軋然(にこにこ)

イ 和語と漢字・漢語、両者の相違を表現に生かす「連想型」類似性」自(ころり)

ウ 漢字・漢語の意味、用法に関わらず、自由に用いる。「連想型」近接性」猿呂猿呂(きよるきよる)

アが伝統的な用法であるのに対してイ、ウは新しく工夫された表記の性格が強い。

連想型の表記は、音象徴語に限らず、「召(やい)」「求(せむ)」のように、他にも多く見られる。又、連想自体は、談林俳諧の句の展開などにも利用され、表記にとどまらず、この時期の表現の特徴であるように思うが、こうした点でも興味深いものである。

第三に、資料の内容、対象とした語、それぞれが俗的な性格を持つものであるが、表記自体も節用集の注記から推測して俗的な性格が強く、臨時的なものも含まれるようである。

最初に述べたように、本来漢字表記されない音象徴語ということ、この時期の漢字の用法のなかでは、かなり突出した、新しい部分を見てきた。実際、非常に自由に漢字が使いこなされているわけであるが、こうした表記を作り出す背後には、漢字、漢語に対する深い知識があるように思う。

今後は音象徴語以外の部分とあわせて、漢字表記の実態を明らかにすることが課題となる。また、伝統的な表記との関わり、それ以後の表記に与える影響など、多くの問題が残る。それらを調査、考察したうえでこうした表記、多様な漢字の用法の意味について改め

て考えてみたい。

注

- ① 鈴木丹士郎「近世語彙の概説」「講座日本語の語彙5近世の語彙」(明治書院)
- ② 山田忠雄「評判記に学んだもの」「歌舞伎評判記集成3月報」(岩波書店)
- ③ 加藤定彦「俳諧と世話字」「第一期近世文学資料類従 古俳諧編四七」(勉誠社)
- ④ 桜井光昭「続無名抄「世話字尽」の擬声語と擬声語の性格」(早稲田大学語学教育研究所紀要20)
- ⑤ 山田俊雄「音象徴語の漢字表記―熱田本平家物語を中心とした覚え書―」(「成城大学文学部短期大学部 創立十周年記念論文集」)
- ⑥ 北原保雄「大蔵虎明本 狂言集の研究 本文編 中」P、54 (表現社)
- ⑦ 池上嘉彦「意味論」P、236 (大修館書店)
- ⑧ 「新釈漢文大系22列子」P、116 (明治書院)
- ⑨ 浅野鶴子 金田一春彦「擬音語、擬態語辞典」(角川書店)
- ⑩ 加藤定彦 注2に同じ
- ⑪ 宮崎修多「野郎評判記初期の型について」「国語国文 六〇巻、11号」
- ⑫ 「国語学研究辞典」「和漢音釈書言字考節用集」の項(明治書院)
- 資料とした文献はつぎのとおりである。
- 「雨夜三杯機嫌」「姿記評林」「歌舞伎評判記集成一、二」(岩波書店)、
「性霊集」「日本古典文学大系 三教指帰、性霊集」(岩波書店)、「大蔵
虎明本狂言集の研究 本文編 中」(表現社)、「仮名手本忠臣蔵」(日本

古典文学大系 浄瑠璃集)、「訓譚字彙」「获生徂来全集五」(河出書房新社)、「醒睡笑上」(岩波文庫)、山内潤三「平松家本平家物語の研究」(清文堂)、「大宋重修廣韻」(中文出版社)、「集韻」(中文出版社)、「説文解字注」(藝文印書館)、「新釈漢文大系、列子」(明治書院)、中田祝夫、峰岸明「色葉字類抄研究並びに総合索引」、正宗敦夫「類聚名義抄」、中田祝夫、根上剛史「中世古辞書四種研究ならびに総合索引」、中田祝夫「古本節用集六種研究並びに総合索引」、中田祝夫・小林祥次郎「書言字考節用集研究並びに総合索引」、同「合類節用集研究並びに索引」、中田祝夫「惠空編節用集大全研究並びに索引」(風間書房)、「第一期近世文学資料類従 古俳諧編四七 続無名抄他」(近世文学書誌研究会)